

2016年2月13日(土)、東京都看護協会主催、東京訪問看護ステーション協議会主催の研修「訪問看護の可能性は∞(無限)」——先駆的な取り組みをしている方のリレートーク」が行なわれた。今回発表された3事業所は、現在の診療報酬の枠にとらわれず、訪問看護の新しい存在意義を創造し地域社会へ積極的貢献するという、新たな動きをみせていた。

障がい児看護への新たなアプローチ

まず、「小児訪問看護と重症心身障がい児デイサービスの取り組み」を、楽患ナース訪問看護ステーション所長の岩本ゆり氏が講演した。同ステーションは、小児在宅医療を行なう医療機関が絶対的に不足しているなか、気管切開・人工呼吸器・経管栄養などを必要とする超重症心身障がい児の訪問看護を積極的に受け入れ、不安を抱える母親に寄り添い、子どもの成長とともに喜びながら、長時間訪問も行なっていた。さらに、障害者福祉制度が医療ケアに必要な子どもたちに対応していないことと、社会資源があまりにも不足している現状を見て、一念発起し、新たに「楽患チャイルド」という児童発達支援を行なう重症心身障がい児デイサービスを開設した。そこで障がい児同士が互いに影響し合って発達していく様子や、看護と介護・リハビリテーションスタッフとが互いに力を合わせたケアの効果、孤立しがちな母親同士がつながり始めたことなどが語られた。障がい児看護の新たなアプローチにみえた。

訪問看護の定着で地域活性化

次の「中山間地域における訪問看護ステーションの広がり発展のための立ち上げ支援」は、ケアプロ訪問看護ステーション東京統括所長だった岩本大希氏が講演した。ケアプロは、もともとワンコインセルフ健康チェック事業が有名だが、東京都中野区と足立区に、24時間・365日稼働する訪問看護ステーションも運営している。さらに、設立当初から

訪問看護の可能性は∞(無限)

東京訪問看護ステーション協議会研修開催

前 中野区医師会訪問看護ステーション、訪問看護認定看護師

徳江幸代

独立開業支援プログラムの開発を活動ポイントに掲げ、わずか設立3年ではあるが、聖路加国際大学と提携しながら新卒看護師の育成プログラムを作成し、ステーションとしても急成長している。そのケアプロが、島根県雲南市の地域医療資源の不足に対して、地方行政、地元NPO法人とタッグを組み、若者の雇用創出と地域医療の看取り難民対策に向けて、訪問看護ステーションの立ち上げ支援を行なった。現地看護師を訪問看護

師として力強く成長させたばかりではなく、見事、半年後には黒字化を達成した。その間、地域の若者によるさまざまなNPO活動が広がりをみせただけでなく、地元出身の若者たちのUターンの流れもでき、内閣府も注目する活動となった。訪問看護が定着することがまさに地域を活性化させる可能性を示した。

コミュニティをつくる看多機

最後に「地域に目を向けた暮らしの保健室と看護小規模多機能型坂町ミモザの家」は、白十字訪問看護ステーション統括所長の秋山正子氏が講演した。「暮らしの保健室」はすでに知る人も多い。これにならない、多くのステーションが相談機能を兼ね備えた活動を始めている。その秋山氏が、昨年、新宿区で看護小規模多機能型居宅介護「坂町ミモザの家」を始めた。ミモザの家は、周辺に住む介護を必要とする人たちが通い、泊まりもできる「わが家」である。そして、時には看取りの場にもなる。地域に溶け込み、近所の人や子ども連れのお母さんたちもふっと立ち寄れる「ホッとできる空間」。まさにコミュニティをつくっていく拠点となるという夢のある報告であった。

さらに秋山氏からは、英国のマジーズセンター(がん患者やその家族などの心を癒す空間と相談支援を行なう施設)を日本にもつくりたいと、がんサバイバーや多くの一般市民、そして企業をも仲間にして活動を広げ、今年開設する「マジーズ東京」も紹介された。



◀左から、秋山正子氏・岩本大希氏・岩本ゆり氏・座長の諏訪部高江氏(浅草医師会立訪問看護ステーション所長)

先進的な3事業所の取り組みを通して、訪問看護は、新たな地域活動へ大きく可能性を広げてきていると感じた。